

# 証言 通信社史

公益財団法人新聞通信調査会



## 刊行にあたって

日本で初のナショナル・ニュース・エージェンシー（国家代表通信社）としてスタートした同盟通信社は1945（昭和20）年の敗戦後間もなく自主解散し、約10年にわたる歴史に幕を閉じた。その仕事は共同・時事両通信社に継承されたが、47年に同盟通信出身者を中心とする財団法人通信社史刊行会が設立され、約11年の歳月をかけて1000ページに及ぶ『通信社史』を編さんした。第二代同盟社長の古野伊之助氏は同書の序文で「過去70年になんなんとするわが国新聞通信界の苦闘と生長の歴史を振り返り、その社会的背景と内的指導精神を究明して将来の参考に資する」と記した。

新聞通信調査会は60年、この通信社史刊行会を改称して発足、2009年に公益財団法人に移行した。正史ともいえる『通信社史』刊行後、同盟の元職員から取材の生々しい記憶や先輩、後輩、同僚の思い出、職場の雰囲気伝える声を盛り込んだ『通信社史』続編の刊行を求める声が高まった。その声を受けて62年ごろから新聞通信調査会は編集委員会を立ち上げ、同盟元職員による座談会を精力的に開催、手記執筆も依頼するなど63年末の刊行を目指した。しかし、作業は遅れ、結局刊行には至らなかった。そ

の事情はつまびらかではない。

続編編集作業では大量の座談会速記録と手記原稿が残された。速記録と原稿は未編集のままタイプされ、「報道報国の旗の下に」というタイトルが付けられ、1部だけが綴じられて新聞通信調査会の事務所に保管されてきた。この速記録と原稿を編集し、63年に創刊した月刊の会報誌「新聞通信調査会報」(その後、現在の「メディア展望」に改称)に掲載された同盟元職員の手記などを加えて時系列にまとめたのが今回刊行した『証言 通信社史』である。内容は①国際と東方の時代②聯合の時代③満州国通信社④同盟発足と日中戦争⑤太平洋戦争下の同盟⑥敗戦前後と引き揚げ⑦通信社の技術⑧同盟解散―の8章で構成される。

『証言 通信社史』は、正史に対していわば現場の肉声であり、国家代表通信社としての同盟発足までと、発足から解散までの裏面史と位置付けられよう。新聞通信調査会は70年に伝記『古野伊之助』を、また2009年には『岐路に立つ通信社』をそれぞれ刊行しており、これらと合わせて、日本の通信社に関する記録保存事業はひとまず完結する。18年には新聞通信調査会のホームページにデジタルアーカイブを開設、同盟通信の活動は今回の『証言 通信社史』を含め、デジタルで閲覧できるようになった。メディア史研究者にとっては有意義だと思う。

『通信社史』も『証言 通信社史』も、戦時下の同盟通信の活動に肯定的なトーンは共通している。同盟出身者の手になる社史であり、証言、回想記

である以上やむを得ない面はあるだろう。しかも同盟の活動時期は戦時下である。平時に比べれば権力との間合いが難しい。それは通信社に限らず、新聞社も同様だった。戦争の反省が活発になったのは高度経済成長によって国民に余裕ができ、さらに東西冷戦が終結してからのように思う。とは言え、同盟通信の活動に反省の必要がないと言うつもりは全くない。

初代社長の岩永裕吉氏、そして古野氏が同盟のモデルとした米国のAP通信は07年に『ブレーキングニュース〜AP通信社報道の歴史』（邦訳は11年に新聞通信調査会が刊行）を出版した。序の中でニューヨーク・タイムズのサイゴン（現ホーチミン）特派員だったデービッド・ハルバースタム氏はベトナム戦争を振り返り「APのサイゴン支局は最初から、いわゆる『チームの一員』ではなかった」と書いている。「チームの一員」とは米政府当局がメディアに要請していたことを指す。時代には差があるが、翻って同盟通信はどうだったであろうか。『岐路に立つ通信社』の序文で、当時の理事長・前田耕一氏は「同盟時代の権力との距離感のなさが招いた事態に思いを致し、通信社ジャーナリズムの衰退を招くようなことがあつてはならない」と戒めている。

中村草田男が「降る雪や 明治は遠くなりけり」と詠んだのは昭和6年。明治が終わってから20年ほどだ。それに比べれば昭和は、わけでも戦前はずっと遠くになった。『証言 通信社史』に掲載された座談会のメンバーや手記筆者の多くはすでに鬼籍に入っている。同盟通信の歴史には欧

米の通信社と伍して活動した「光」の部分があっても、戦局の悪化から敗戦、外地からの引き揚げなど悲惨な「影」の部分があつたことも間違いない。中国、かつての満州、東南アジア、欧米など海外に駐在した記者やカメラマン、通信担当者らの証言、また国内各部署の職員の証言は、歴史資料として貴重なものもある。これらすべてをまとめて、歴史の風化に歯止めをかけ、通信社ジャーナリズムを発展させる糧としたい。

本書の編集に当たっては、共同・時事両通信社のOBで委員会を設置し、宮脇英朗、飯岡志郎、松本紀生、沼田清、信太謙三、安達功の各氏には多大な尽力をいただいた。中でも編集長として編集作業を統括した宮脇氏と、全体調整にあたった新聞通信調査会の米山司理氏に深く感謝する。

2021年6月

公益財団法人新聞通信調査会理事長 西沢 豊

## 出典、編集・表記基準について

### (1) 出典

本書に収録した座談会や手記・談話、会議録などの出典は次の通り。出典別の座談会、手記一覧表は巻末に掲載した。

#### 「報道報国の旗の下に」(新聞通信調査会記録集)

1958年に『通信社史』が刊行された後、同盟通信元職員の間で続編刊行を求める声が高まった。これを受けて新聞通信調査会は続編(仮称『続・通信社史』と名付けられた)刊行のための編集委員会を立ち上げ、62年から65年ごろにかけて資料集めのための座談会を精力的に開催、手記や談話なども収集した。しかし、『続・通信社史』刊行プロジェクトはその後立ち消えとなり、座談会の速記録や手記、談話の原稿は編集を施されることもなく、「報道報国の旗の下に」というタイトルをつけて多くが未公開のまま新聞通信調査会に長年保管されてきた。この座談会17編と、手記、談話計21編を編集しすべて収録した。これが本書の中核を成している。

#### 「新聞通信調査会所蔵資料」

同盟の理事会、社員総会速記録、古野伊之助社長訓示の計5編は、新聞通信調査会所蔵の資料を基にした。

#### 「新聞通信調査会報」「メディア展望」

新聞通信調査会が63年1月に創刊、2009年4月に「メディア展望」と改題し、現在も刊行を続けている月刊会報誌。創刊以来90年代ごろまで断続的に同盟元職員の回想録を掲載

しており、その中で興味ある計212編を選び再録した。

#### 「同盟通信社報」

同盟の社内報は36年11月に第1号が発行され、44年3月発行の78号までは新聞通信調査会が所蔵している。「議会展材の舞台裏」と「8日間の監禁生活―開戦当時のブラジル」の2編を選び、いずれも第4章に収録した。

#### 「南船北馬」

中国勤務の経験がある同盟元職員で構成する「同盟・中国の会」が81年から88年にかけて毎年1回発行した会誌。同盟職員の中国での活動の様子が描かれており、計51編を収録した。

#### 「マカッサル支社局の記録」

同盟のマカッサル支社管内に勤務した経験者で構成する「マカッサル会」が91年に作成した冊子。「苦難と危機を乗り越えて」という副題が、その内容を端的に示しており、ここからも計7編を収録した。

#### 「太平」

45年11月、時事通信発足とともに同社が発刊した月刊総合雑誌。47年3月号で廃刊。時事の記者が多くの記事を執筆しており、長谷川才次氏の「ポツダム宣言受諾を海外向けに放送」を再録した。

#### 「共同通信社友会会報」

共同通信社友会の会報で年1回発行。計9編を収録した。

#### 「十五年のあゆみ」

「時事通信OBクラブ」が創立15周年を記念して89年に発行した寄稿文集。計7編を収録した。

#### 「日本航空史 明治・大正篇」

国際通信社北京支局主任（支局長）だった古野伊之助氏が21年に書いた航空試乗記を収録。

## (2) 編集・表記の基準

### ① 章立て

座談会、手記を収録するにあたっては歴代通信社が創立された年代順を原則に章を立て、各章では国内、国外またはテーマごとに大別し、地域的には北から南への配列を基本とした。

### ② 座談会

発言者の言葉遣いをできるだけ尊重したが、話が飛ぶなどして理解が困難な場合や、年月や場所などに明確な誤りや勘違いがある場合は、原意を損なわない範囲で編集した。現在の基準では、中傷や差別とも受け取れる「不適切発言」もあるが、「証言」として記録に残すため、言い換えはできるだけ避けた。個人や組織の誹謗中傷<sup>ひぼうちゅうけう</sup>につながる発言は、証言としての価値が低い場合は削除した。

「報道報国の旗の下に」の座談会速記録には出席者の役職が記されていない。読者の理解を深めるため、語られるテーマの時代に最も近い時期の名簿などで確認できる役職を記した。

### ③ 手記、談話

手記、談話は座談会と同様そのままの収録を原則とし、修正が必要な場合は、座談会と同じ基準を適用した。内容が戦後の共同・時事時代に及ぶ場合は、適宜省略した。

### ④ 解説

刊行に当たって編集委員が書き下ろした。

### ⑤ 編集者注

新聞社、通信社の社内用語、歴史的な事象、事件などには番号を振った上で第8章の後に簡単な注釈を掲載した。

### ⑥ 人物紹介

座談会出席者、手記執筆者を中心に本書に登場するメディア関係者、メディア以外の関係者の略歴などを記載した「人物紹介」を第8章の後に掲げた。メディア関係者は、新聞通信調査会に残された資料を参考に作成した。データが十分ではなく、経歴などは判明部分だけ

を記載した。

#### ⑦表記の基準

用字用語や地名、人名の表記は、共同通信社編「記者ハンドブック(第13版)」や時事通信社編「最新・用字用語ブック(第7版)」に準拠した。数字は洋数字を原則とした。引用文中の旧漢字(旧字体)、旧仮名遣いは原則そのままにした。基準とは異なっても、著者の表記の方が「証言」としてふさわしい場合には、オリジナルの通りとした。年月については筆者の表記に従い、初出や必要な箇所には、和暦の場合は西暦、西暦の場合は和暦を補った。

差別語や不快用語、現代では使用しない言葉は、「証言」として不可欠かどうかを慎重に検討した上で、ケース・バイ・ケースで判断した。「支那」や「支那人」などは、現在では言い換え対象の表現だが、基本はそのままとした。読みにくい地名、人名などには判明した範囲で各記事の初出にルビを振った。

#### ⑧写真、地図

座談会や手記の内容を補うため写真や地図、図解などを付けた。

#### ⑨索引

巻末に人名索引と事柄索引を掲載した。

『証言 通信社史』編集委員会

刊行にあたって……………i

出典、編集・表記基準について……………v

第1章

国際と東方の時代

概要……………02

第1節

国際通信社……………04

〈座談会〉葵町事務所のケネディ……………04

社を「お店」といった時代……………08

〈談話〉国際経済通信の初期……………11

経済通信の草創時代……………14

無料だった国際経済週報……………14

満鉄の未承認鉄道敷設を特報……………15

北京―濟南の航空便試乗……………16

打っても打っても原稿の山……………18

御大典報道にてんてこ舞い……19

〈座談会〉大阪で活躍した人々……20

大震災で大阪は非常態勢ゝ座談会補足……34

岩永さんの合服……36

〈解説〉岩永裕吉論ゝ「報道の独立」と「国家意識」……37

## 第2節

東方通信社……42

〈座談会〉東方時代の思い出……42

覆面部隊で中国に無線連絡網構築……60

〈座談会〉北京時代の平田さんの思い出……61

## 第2章

# 聯合の時代

概要……76

## 第1節

国内ニュース配信……78

〈座談会〉国際から聯合へ……78

〈座談会〉聯合と内信（第1部）……91

〈座談会〉聯合と内信（第2部）……103

〈座談会〉広告聯合の思い出……114

聯合の内信開始と10年間の活躍……125

第2節

写真スクープ……………153

商業通信と聯合は相互共助……………132

五・一五事件首謀者の留守宅取材……………133

経済通信20年と思い出の人々……………134

一日の仕事は外電受信から……………137

聯合・大連で経済通信……………138

太平洋無着陸横断飛行の報道合戦……………138

社会部1年生で大相撲取材……………140

北満鉄道の買収交渉取材……………142

「聯絡操典」と新米速記者……………144

バッグ便の中身は写真と原稿……………145

プラットホームを走り抜け……………145

居残り仕事も度々……………146

合併契約書案文をタイプ……………147

諸先達の教訓……………147

ご機嫌な青春く新聞聯合……………148

帝国通信から新聞聯合へ……………151

同報電話方式を開発……………152

決定的な1／15秒く浜口首相狙撃の瞬間……………153

アンゴラからスピグラへ……………155

私の上海特急……………156

写真送稿で電通に勝つくマニラの極東オリンピック……………157

〈解説〉報道写真の系譜……………159

第3節

大陸に展開……………167

西安事件スクープの経緯……………167

学卒浪人から聯合北京支局入社……………170

束の間だった上海支局長……………172

上海でロイター電を転送……………178

国際通信入社1カ月で聯合発足……………179

汪政権の成立から崩壊まで見届け……………179

聯合、同盟で中国生活14年……………180

上海は国際宣伝戦の坩堝……………181

汪兆銘狙撃現場を撮影……………184

魯迅も危うく拷問に……………185

第4節

電通、聯合が一体に……………187

直通電話開通で青森へ……………187

カメラマンは「ボンタキ3年」……………188

上田碩三さんのこと……………189

戦争取材で中国各地を転々……………192

満州事変発生の一報を受ける……………193

満州里で中国軍に捕まる……………196

第  
3  
章

満州国通信社

概要……………200

第1節

国策遂行機関……………202

岩永意見書が国通誕生の発端……………202

新米オペレーターのところ……………203

編集局の日曜昼下がり……………203

視察経済人の案内役も……………205

最後の関東軍報道班員に……………205

日満回線北端の速記者……………206

のんびりしたハルビン時代……………208

酷寒の大興安嶺を搜索飛行……………209

東条の一声でぶち込まれる……………210

ノモンハンで爆撃機に同乗取材……………211

振り回された関特演……………212

松岡外相と満鉄マン……………213

日満直通専用電話の威力……………215

ハイラル支局始末記……………216

馬占山戦死の誤認、身代わり残してソ連に脱出……………218

第2節 「国通」の終焉……………221

〈座談会〉満州国の最後……………221

満州崩壊と国通の終焉に立ち会う……………233

第4章

同盟発足と日中戦争

概要……………238

第1節 二・二六事件……………240

岡田首相生存の速報に成功……………240

小料理屋で見かけた首謀者の安藤大尉……………243

半蔵門の反乱軍を撮影……………247

第2節 日中戦争……………248

〈座談会〉日中事变下の同盟……………248

盧溝橋事件の取材を志願……………258

自宅金庫から株券を……………260

広安門事件で撃ち合いの現場に……………261

刑場から奇跡の生還く通州事件……………265

嫌だった戦死者の留守宅回り……………267

同盟の影武者く柳町精氏……………268

盧溝橋事件が「同盟ニュース映画」第1号……………270

### 第3節

## 大同結盟……………275

忘れられない朝日・緒方氏の発言……………275

中支戦線の古野・板垣会談……………277

南方出張で古野さんと合流……………279

カメラマンはネクタイを……………280

戦時下で古野さんと歌舞伎論議……………281

電話で社長に「バカヤロー」……………281

「二千六百年記念式」を代表撮影……………282

初仕事は杭州湾上陸のニュース映画……………283

電力国家管理計画をスクープ……………284

消えてなくなった学芸欄……………286

聯合、電通の人事カードを整理……………287

五鬼上事務所から同盟へ……………288

職場旅行は半ば強制……………289

外信原稿もタイプ……………289

株相場を伝える「歩み」係……………290

調査部作りで大激論……………290

内経部の第1号部員……………291

電聯合併で編集スタッフ大幅増……………292

人海戦術で相場速報……………293

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| 写真のバッグ便通信……………             | 293 |
| 電聯合併直後の政治部……………            | 294 |
| 入社後8カ月で入営……………             | 294 |
| 入社当時の同僚……………               | 295 |
| 速記者の入社試験……………              | 296 |
| 千葉空襲で稲毛海岸に逃げる……………         | 296 |
| 札幌支局を開設……………               | 297 |
| 開設当時の新潟支局……………             | 298 |
| 特高が毎日、支局に……………             | 299 |
| 電聯合併後の岡山支局……………            | 299 |
| 記事は自転車で配達……………             | 300 |
| 中国人名は頭痛の種……………             | 301 |
| 佐賀支局を開設し定年まで……………          | 302 |
| デスクに怒鳴られる日々……………           | 303 |
| 組閣テント村から大火取材へ直行……………       | 304 |
| 通称やニックネームで呼び合い……………        | 305 |
| 秘書業務の合間に公園で教練……………         | 306 |
| 〈座談会〉大屋、萩野両君をしのんで……………     | 308 |
| 大屋久寿雄の大虚報く国益のため目をつぶって…………… | 318 |
| 議会取材の楽屋裏……………              | 320 |
| 〈座談会〉新聞統制について……………         | 322 |
| 憲兵隊で取り調べ受け罰金刑……………         | 331 |

中国の総支社局……………333

名門近衛家の悲劇……………333

勉強家だったギンスバーグ……………334

暗号戦争に敗れた日本……………335

北京で写した不滅の名印画……………336

豪華バッテリーの親善野球……………337

軍馬輸送の専用車で天津赴任……………338

商都天津で商品市況を取材……………338

命懸けた青春の同盟時代……………339

新婚早々に赤紙、6年の軍隊生活……………340

日刊紙「太原新聞」発行……………343

危険顧みず山中単独行……………343

『麦と兵隊』さながらの従軍……………343

宣伝上手だった中国軍……………344

南京虫の襲撃で夜も寝られず……………345

南京でボランティア日本語教師……………346

汪政権要人の「愚園帖」……………347

上海陥落を最前線で……………348

1930年代の上海の人々……………350

崇明島に不時着した同盟機……………353

小型無電機とともに前線へ……………354

中支の経済状況を取材……………355

記者クラブ視察団の揚子江下航記……………355

海南島で海軍爆撃機に同乗……………356

死も覚悟した「写真大観」取材……………358

半生をジャーナリストとして……………359

水牛道連れに従軍、最前線へ……………359

包と蛋民の暮らし……………361

忘れられない蒙古人の親切……………363

米英の資産凍結措置で香港支局閉鎖……………364

## 第5節

欧米圏の取材網……………366

独ソ秘密協定をスクープ……………366

ロンドン大空襲で被爆……………368

ファシスト党員の支局助手……………370

戦争直前のニューヨーク支局……………371

シドニー支局開設と経済通信開始……………372

8日間の監禁生活、開戦当時のブラジル……………373

## 第5章

# 太平洋戦争下の同盟

概要……………378

第1節

開戦の火ぶた……………380

真珠湾攻撃の外国ラジオ放送を傍受……………380

日米開戦時のニューヨーク支局……………382

眼前で開戦の火ぶた……………384

連れ去られた上海ロイター社員……………386

緒戦のマニラで抑留……………387

乏しかったアメリカ情報……………389

戦時下、対外英文放送の記事執筆……………390

第2節

国内での活動……………391

収入不足分は政府が負担、戦時下の同盟経理……………391

社長指示で市政会館に会議室設営……………393

室蘭支局の開設から撤収まで……………394

鉄道電話で仙台大空襲の一報……………395

無線機持ち鳥取大地震現場に……………396

無線機は日銀支店の地下室に……………396

開戦当日は終日勤務……………397

早めに配信終え、釣りに……………397

業種別通信の発想は大阪内信部……………398

米飛行機の写真をスクープ……………399

同盟航空部始末記……………400

幻の東南海大地震の津波目撃……………404

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 古野さんに晒巻く……            | 405 |
| 死を覚悟の後、突然の帰国命令……      | 406 |
| 松本編集局長の言葉……           | 407 |
| わずか2カ月の勤務……           | 408 |
| 日比谷公園で銃剣術の訓練……        | 408 |
| 長谷川さんの口述筆記……          | 409 |
| 多摩川寮の寮長、隣組長に……        | 410 |
| 同盟時代に応召、復員後共同へ……      | 411 |
| 軍事訓練、もんぺ代わりにパジャマ姿……   | 412 |
| 初の本土空襲で本社に駆け込む……      | 413 |
| 重要書類は多摩川べりの家屋に疎開……    | 413 |
| 天皇の東京大空襲被災地視察を代表撮影……  | 414 |
| 空襲で同盟別館全焼……           | 415 |
| 同盟大阪支社が炎上……           | 416 |
| 中之島の渡辺橋下で活動再開……       | 418 |
| 平穏破る重大発表予告、鈴木内閣誕生の夜…… | 418 |
| 「敵性情報」または「特情」のこと……    | 422 |
| カメラで追った戦時下の南方……       | 425 |
| 数々の歴史的瞬間を撮影……         | 430 |
| それは地獄だった、激戦地歩んだ報道班員…… | 431 |
| 反戦分子と勘違いされ拘引……        | 434 |
| 従軍記者に破格の餞別……          | 435 |
| 鉛筆に銀文字で「同盟」の刻印……      | 436 |

今も口ずさむ「報道戦士の歌」……………437

〈解説〉記者と兵士のはざまで「報道班員」の実像……………438

### 第3節

## 海外の同盟記者……………443

北千島従軍記……………443

従軍で強行軍の厳しさ味わう……………445

内蒙古・包頭で迎えた正月……………446

綿花生産地で買い付け状況視察……………447

敗戦後、青島市の寛大な措置……………447

44年冬の深夜の北京駅……………448

親日中国人に日本人警官が暴言……………450

保定でイナゴ退治に参加……………452

石門で経済通信発行……………452

最後の従軍記事は洛陽占領……………453

残念だった伊大型客船の自沈……………454

南京支局社宅の怪談……………456

快適だった2年間の上海勤務……………457

上海で外電力バー、不安覚える……………458

「神戸丸」の沈没く二百数十人死亡も闇に……………459

南支総局ビルに機銃掃射……………461

広東支局草創のころ……………462

汪兆銘主席と近衛公の一言……………462

南方特派員団を高雄港に案内……………463

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| チャンドラ・ボースの死に遭遇……………     | 464 |
| 〈座談会〉太平洋戦争と南方(第1部)…………… | 465 |
| 仏印進出からシンガポールまで……………     | 476 |
| インパール作戦の前線支局へ……………      | 479 |
| 混乱もなく収容地カンエンへ……………      | 480 |
| サイゴンで「同盟ニュース」発行……………    | 480 |
| 「陣中西貢新聞」を発行……………        | 481 |
| 仏主権下で軍機関紙装う……………        | 482 |
| ビルマ前線基地に碁盤と碁石……………      | 483 |
| 現地召集でビルマ戦線へ……………        | 483 |
| 終戦近づき支局にぎやかに……………       | 485 |
| タイピン支局開設から終戦まで……………     | 485 |
| シンガポールで新聞発行……………        | 487 |
| 貨物船雇い、コメの買い出し……………      | 487 |
| 昭南の『陽気な娘たち』……………        | 488 |
| 同盟だけに事務所設置許可……………       | 490 |
| 飢えと熱病の北ボルネオ戦線……………      | 491 |
| バリックパパン支局始末記……………       | 492 |
| 軍が日本人の身辺調査、マカッサル支社…………… | 494 |
| 石油の島タラカンに支局開設……………      | 497 |
| 短命だったタラカン支局……………        | 498 |
| 陸海軍の板挟みで苦しんだメナド支局……………  | 499 |
| 最も危険なアンボン支局……………        | 501 |

第  
6  
章

敗戦前後と引き揚げ

概要……………534

米軍上陸で山に逃げる……………502

飛行機で連続3度の命拾い……………504

敵の魚雷攻撃を同盟機から目撃……………505

2カ月の命だったパラオ支局……………506

心強かった同盟の海外総支局……………509

グアム島玉砕戦従軍記ゝジャングル彷徨の末捕虜に……………510

ミッドウェー敗戦の衝撃……………512

ソロモン海戦の敗因は陸海軍の抗争……………514

狭まる包囲網から脱出ゝ敗戦直前のベルリン……………517

シベリア鉄道沿線に敗色漂う……………520

外交断絶後に独房へゝアルゼンチン……………521

開戦でリオ通信員から戦時調査室へ……………524

エンピツ一本の重さ……………525

ニュース映像で悪戦苦闘ゝ伝え切れなかった戦争の悲惨……………526

〔解説〕「昭南新聞会」ゝ軍と協力、同盟が新聞を発行……………529

第1節 同盟本社で……………536

〈座談会〉空襲下の同盟本社と戦争末期から終戦まで……536

同盟中枢の松代移転計画……546

蓼科高原に農場を建設……547

河川敷開墾し、ジャガイモ畑……549

本土決戦に備える……550

米スポークスマン、ザカライアスとの対話……550

## 第2節

大陸撤退へ……553

終戦で単身者は日本料理屋跡に収容……553

一晩で上海の街は一変……555

忘れられない総局の中国人……556

中華総社職員に敵のスパイ……557

華南総局の仕事納め……558

## 第3節

戦争末期の南方……559

〈座談会〉太平洋戦争と南方(第2部)……559

〈座談会〉終戦前後の比島……572

ミンダナオ山中をさまよう……587

兄・黒沢俊雄の思い出……588

## 第4節

原爆投下……590

ポツダム宣言受諾を海外向けに放送……590

原爆投下48時間の恐怖と、そのとき私は広島に……595

第5節

|                      |            |
|----------------------|------------|
| 支社長以下5名が犠牲に……………     | 599        |
| 支社長の柩は筆筈の引き出し……………   | 600        |
| 支局の屋根割れ、窓吹き飛ぶ……………   | 602        |
| 負傷の支局長が投下の第一報……………   | 602        |
| 9月には叢書『原子爆弾』発行……………  | 603        |
| <b>ポツダム宣言受諾……………</b> | <b>604</b> |

敗軍の将、ポツダム宣言受諾に涙…………… 604

長谷川局長の夜中の電話…………… 605

日比谷公園で写真を焼却…………… 606

「筆剣一如」の日の丸肩に入隊…………… 606

書類焼却を手伝う…………… 607

深夜に終戦詔書を受信…………… 608

ポツダム宣言受諾電を受信…………… 608

「玉音放送」を反訳する…………… 609

不発に終わった暗号解読…………… 611

戦時下同盟の対外放送…………… 614

終戦第1号は10万部が即日売り切れ、世界週報…………… 617

軍報道部から情報取りに同盟へ…………… 619

第6節

**苦難の引き揚げ…………… 622**

ついに巴港の灯を見たく樺太からの引き揚げ…………… 622

シベリア抑留の日本兵を見届け…………… 629

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| シベリア・チタ監獄の浴場……………             | 629 |
| 終戦で孤立、死闘重ね騒乱の平壤脱出……………        | 630 |
| 最後に帰国、社に席なし……………              | 632 |
| 漢口、引き揚げ日録……………                | 634 |
| 集中営からコレラ船へ、ハノイからの引き揚げ……………    | 638 |
| サイゴン終戦記、生涯忘れ得ない現地人の好意……………    | 640 |
| 最後の西貢通信は総選挙結果……………            | 645 |
| 暗号表、肌身離さず解読作業……………            | 646 |
| ニュース翻訳の報酬はたばこ2箱……………          | 646 |
| ゴム林での降伏式……………                 | 647 |
| 敗戦、抑留、ニュース戦、マカッサルからの引き揚げ…………… | 650 |
| PRビラを執筆、ボルネオ全土に散布……………        | 654 |
| 金の延べ棒腹に巻き収容所へ……………            | 655 |
| セレベス山中で阿南大将と会見……………           | 656 |
| 人情に国境なし……………                  | 656 |
| 同盟の灯、燃やし続ける……………              | 657 |
| 苦難のジャングル逃避行……………              | 658 |
| マハカム川河口で被弾、漂流……………            | 659 |
| 敗戦後、地獄に突き落とされる……………           | 660 |
| 空襲のアンボンから極楽島のメダンへ……………        | 661 |
| アルプス山麓で終戦、米国経由で帰国……………        | 664 |
| 列車でベルリン脱出、最後の電報はヒトラー自殺……………   | 668 |
| 遭難前夜のチャンドラ・ボース……………           | 671 |

第  
7  
章

通信社の技術

概要……674

第1節

無線……676

〈座談会〉無線の活躍……676

奉天時代の無線……689

〈座談会〉通信近代化の夜明け……690

ポータブル無線機秘話……692

昭和史と歩んだ数奇な経験……694

第2節

電送技術……697

同盟式文字電送機……697

第  
8  
章

同盟解散

概要……700

第1節

自主解散への道……702

〈座談会〉敗戦と同盟、終戦から解散まで……………702

古野伊之助社長訓示（9月17日）……………713

同盟通信社第33回理事会速記録……………718

同盟通信社第34回理事会速記録……………725

同盟通信社第13回（臨時）社員総会速記録……………729

古野伊之助社長訓示（10月15日）……………731

## 第2節

### 悲壮な決意……………742

〈座談会〉先手を取った同盟解散……………742

自殺未遂の東条邸へ、最後の同盟記者……………745

〈解説〉「思想戦」を掲げた古野伊之助氏の素顔……………746

編集者注……………752

人物紹介……………765

出典……………798

掲載写真・図版の出典……………805

参考文献……………808

編集委員プロフィール……………810

あとがき……………811

索引（人名・事柄）……………830